

五姓田のすべて—近代絵画への架け橋—

会場／岡山県立美術館 2F 展示室

このたび岡山県立美術館では、幕末・明治期の洋画における注目すべき動向であり、岡山出身の作家も深く関わっていた、五姓田派の動向を総合的に紹介する初の展覧会として、『五姓田のすべて—近代絵画への架け橋—』を開催します。

五姓田派とは、五姓田芳柳(1827-92)と、彼に学んだ画家たちの一派のことを言います。五姓田芳柳は独学で西洋画法を学び、幕末から明治初期の横浜において、絹地に独特の肖像画や風俗図を描き、人気を博しました。明治6年に東京に移ったのちは、ジオラマ制作を通じて西洋画法の普及に努め、また解剖学を学び、写実表現を研究しました。門人には、のちに渡欧し、熟練した油彩画の技術を身につけた、芳柳の実子・五姓田義松(1855-1915)や山本芳翠(1850-1906)がいます。また同じく芳柳の実子であった幽香(1856-1942)と結婚した渡辺文三郎(矢掛町出身：1853-1936)や、自著『明治初期洋画壇回顧』にて当時の動向を活写している平木政次(高梁市出身：1859-1943)など、岡山

出身の作家が含まれていることが大きな特徴です。

本展は、洋画草創期の日本において注目すべき活動を行っていた、これら五姓田派の画家たちに焦点を当て、その歴史的意義を検証し、またこの動向に関わった郷土作家の業績を紹介します。



『西洋婦人像』神奈川歴史博物館蔵

関連事業(詳細はお問い合わせ下さい)

- ・明治美術の中の五姓田(仮題) 10月11日(土)14:00～15:30
- ・美術教育の中の五姓田(仮題) 10月19日(日)14:00～15:30
- ・五姓田の魅力、五姓田の謎(仮題) 10月26日(日)14:00～15:30

「シャガールの版画—高知県立美術館コレクション—」

会場／岡山県立美術館 B1 展示室



『人間に女が変わった雌ネコ』(『ラ・フォンテーヌの寓話』より)
©ADAGP, Paris & SPDA Tokyo, 2008

高知県立美術館のご協力を得て、シャガール(1887-1985)の版画に焦点を当てた展覧会を開催します。高知県立美術館は、開館当初よりシャガールの作品収集に力を注ぎ、展示室の一つをシャガールの作品を展示するために用い、シャガール展として年間を通じて公開しています。シャガールの版画作品だけで1200点を超える、質・量ともにすばらしいコレクションです。このたびの展覧会では、この一大コレクションから約250点を展覧します。展覧会に先駆け、展示予定作品をご紹介します。

『ラ・フォンテーヌの寓話』(1927-30年制作 1952年刊行) 『ラ・フォンテーヌの寓話』とは、17世紀フランスの詩人ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ(1621-1695)が30

年間かけて創作した242編の寓話詩集です。『イソップ物語』や、インド、ペルシアや東洋の寓話を素材としていることから、私たちにとてもなじみ深いお話がいくつもあります。シャガールは、画商ヴォラールの依頼を受け、この寓話の挿絵を版画にしました。エッチング・アクアチント・ドライポイントの技法で刷られた後、シャガールの手で彩色が施されています。作品ごとに、刷りだけでなく彩色も異なる表現で、シャガールらしい繊細な色遣いや、愛らしい動物たちの姿を見ることができます。

この他にも『ダフニスとクロエ』、『アラビアンナイトからの四つの物語』、『屏風』などを展示予定です。シャガールの版画を一度にたくさん見ることができるまたとない機会です。どうぞお出かけ下さい。

【学芸員 細田樹里】

関連事業(詳細はお問い合わせ下さい)

- ・中学生鑑賞教室「美術館へGO!!」 10月11日(土)13:30～
- ・担当学芸員によるフロアレクチャー 10月12日(日)14:00～
- ・版画のワークショップ
- ・「ドライポイントで夢の生き物を描く」 10月18日(土)13:00～
- ・美術館講座「シャガールの版画」 11月1日(土)14:00～



『初秋の朝』

展覧会ができるまで

版画の表現と技法 展 (2008年7月18日(金)～8月24日(日)開催)

この展覧会は、浮世絵展が開催されるのを機会に、一般には分りにくい版画の技法を理解していただこう、また東西の版画技法と表現の違いを比べて見ていただくという狙いで準備がスタートした。当初は浮世絵版画の影響を受けたジャポニズムの版画作品も展示したかったが、借りられる作品がなかなか見あたらないので、それは叶わず、ルネサンス以降の西洋の版画作品を展示して、東西の版画技法の違いを比べながら鑑賞して頂くことにした。古典的な西洋銅版画を系統立てて所蔵している町田市立国際版画美術館にお願いして、シヨウガウアーからケーテ・コルヴィッツまで、選りすぐりの名品をお借りすることができた。また日本の近現代版画も合わせて紹介し、多様に展開していく版画表現の一端を紹介できればと考え、和歌山県立近代美術館にお願いして、これも山本鼎から若林奮までの日本の近現代版画の代表的な作品をお借りすることができた。さらに当館に寄託されている版画作品の中から、ピカソ、ウォーホルなどの作品を選んで展示した。

版画技法の解説パネルは、新任の子川学芸員がパソコンで作ってくれた。版画の技法を理解するのが難しいのは、版と作品とが頭の中でつながりにくいということがあると思われるので、代表的な4つの版画技法の版と作品の実物展示をしたと考え、凸版(木版画)凹版(銅版画)平板(リトグラフ)を岡山県立大学の関崎哲氏に、孔版(シルクスクリーン)を高原洋一氏にお願いして、それぞれ版と作品を提供していただいた。このような形で実物を目にする機会はなかなかないので良い機会となったのではないかと思う。

西洋では木版、銅版画、石版画、シルクスクリーンという具合に、版画の技法は時代と共に進んできたので、版画史を辿るような構成になった。

筆者自身は版画制作の現場を目にしたことがなく、高原洋一氏のアトリエにおじゃまして、シルクスクリーン制作を実演して見せていただいたことは、版画という表現分野が一気に身近に感じられるようになった貴重な機会となった。実際に目にする、さらに実際に制作してみることが格段に理解を深める体験となることを改めて認識した次第です。



展示会場風景



シルクスクリーンで制作している様子

平成20年度 特別展、岡山的美術展などのご案内

<p>特別展(地下1F展示室) 第59回岡山県美術展覧会 9月3日(水)～9月14日(日)</p>	<p>テーマ展(2F展示室) 満谷国四郎 8月26日(火)～10月3日(金)</p>	<p>特集展示(2F展示室) 花・百華—画布に咲いた花々— 11月12日(水)～12月7日(日)</p>
<p>特別展(2F展示室) 五姓田のすべて—近代絵画への架け橋— 10月7日(火)～11月9日(日)</p>	<p>岡山的美術展(2F展示室) 国吉康雄の版画と素描、大正・昭和の油彩画 8月26日(火)～10月3日(金)</p>	<p>日本伝統工芸展共催企画(2F展示室) もっと伝統工芸 技と美の出会い 漆芸 11月12日(水)～12月7日(日)</p>
<p>特別展(地下1F展示室) シャガールの版画—高知県立美術館コレクション— 10月7日(火)～11月9日(日)</p>	<p>テーマ展(2F展示室) 新たな出会い—おかやまアート・コレクション探訪— 8月26日(火)～10月3日(金)</p>	
<p>特別展(地下1F展示室) 第55回日本伝統工芸展岡山展 11月20日(木)～12月7日(日)</p>	<p>特集展示(2F展示室) 明治の油彩画 10月7日(火)～11月9日(日)</p>	<p>※詳しくは平成20年度展覧会スケジュールリーフレットでご確認ください。</p>

美術館講座

- 10月25日(土)「工芸基礎講座 漆芸」 講師：福富 幸(学芸員)
- 11月1日(土)「シャガールの版画」 講師：細田樹里(学芸員)
- 11月15日(土)「坂田一男 研究の現状と展望」 講師：妹尾克己(学芸課長)
- 11月29日(土)「県内の渡来仏画リポート」 講師：中田利枝子(主任学芸員)
- 12月6日(土)「科学と芸術の対話」 講師：齋藤武郎(学芸員)

開催時間／14:00～15:30(開場13:30) 会場／岡山県立美術館
地下1階講義室(定員70名) 聴講無料、先着順(事前申込みは不要です)
※美術館講座はすべて岡山県生涯学習大学の連携講座(短期講座)になっています。

美術の夕べ

- テーマ展 9月26日(金) 講師：守安 収(参与)
「新たな出会い—おかやまアート・コレクション探訪」をみる
- 特別展 10月24日(金) 講師：広瀬就久(学芸員)
「五姓田のすべて—近代絵画への架け橋—」をみる
- 特別展 11月28日(金) 講師：福富 幸(学芸員)
「第55回日本伝統工芸展岡山展」をみる

開催時間／18:00～19:00 当日の開催時間は18:00～19:00(入館は18:30まで)
会場／岡山県立美術館 ●2階展示室 ○地下1階展示室
聴講料／聴講には、各展覧会の観覧チケットが必要です。
※各展覧会チラシをご覧になるか、美術館へお問い合わせください。

編集後記

美術館ニュース82号をお届けします。“晴れの国”を自称する岡山県ですが、本号編集作業中の7・8月も、その名にたがわず連日の猛暑でした。そのような暑さの中、多くのお客様に来館していただけたことが、われわれ美術館職員の暑気払いとなりました。この夏、当館では、日本屈指のコレクションを誇る千葉市美術館の浮世絵を紹介する「浮世絵の美展」に加え、親子で備前焼の重要無形文化財保持者に認定された藤原啓・雄を紹介する特別展を同時開催しました。両展覧会を合わせると優に400点を超える出品作品があり、観覧したお客様のほうがバチ気味だったかもしれません(苦笑)。今秋も本号で紹介しているとおり、2つの特別展を同時開催します。古今東西の優れた作家や作品に触れる機会を数多く提供することが美術館の使命であり、来館者の感動や満足が学芸員の活力の源です。この秋も、当館でお客様と作品の素敵な出会いがたくさんあればいいと思う晩夏の日です。 [S.T.]

美術館ニュース 第82号

発行：2008年9月
発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市天神町8-48
TEL：086-225-4800
URL http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html
E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

開館時間／9:00～17:00(入館は閉館30分前まで)
休館日／10月14日(火)、20日(月)、27日(月)、11月4日(火) (10月24日は夜間開館につき19時まで)

吉田苞（1883〜1953）は岡山市生まれの洋画家で、東京美術学校卒業後岡山に戻り、児島虎次郎（1881〜1929）と共に大正元年（1912）に岡山洋画研究会を創立した。初代会長となり、大正から昭和戦前、戦後にかけての岡山洋画壇のリーダーとして活躍した。吉田苞は印象派風のスタイルで身近な風景、静物、人物を好んで描き、特に風景では季節や一日の特定の時間が感じられるものが多い。ここに描かれ

た場所は、住んでいた岡山市小橋町中屋敷の庭先であろう。今では壊されてマンションが立ち往事の面影はまったく伺えないが、ネギが植えられ、棕櫚、向日葵、タデなどが見え、一昔前の岡山県南の庶民の庭の情景を思い起こさせてくれる描写となっている。この向こうは旭川で初秋の朝のさわやかな感じが伝わってくる光と空の描写である。

美術の記 体験

鍵岡館長の

大学一年生の昭和37(1962)年、外国への出国がままならない時期に、カンボジアのアンコール遺跡に行ける機会にめぐまれた。慶應義塾大学バレットクラブが東南アジアに民族美術調査団を派遣する一員に加えられた。アンコール遺跡は8〜12世紀に栄えたクメール王国が遺した広大で巨大な石造遺跡群で、あの有名なアンコール・ワットやアンコール・トムのパイロンなど70をこえる遺跡群である。初めて訪れてからほぼ半世紀たつが、その出会いの体験は鮮明である。灼熱の太陽の下、奥深い森林のなかに巨大な伽藍が、突如、姿を現す。三重の大回廊と天に聳え立つ大祠堂、壮大で雄渾な石造建築にただ圧倒された。都城アンコール・トム城門の巨蛇を胴引きする陸橋をくぐると、中の寺院パイロンは半顔微笑の四面観世音菩薩の立塔が林立する。禍々しい美としかいようのない美、全く出会ったことのない美の存在。こうしたかつてのクメール族の立体造型の凄さと対照的な、カンボジアの村人たちの屈託のない笑顔と素朴な生活に、ある種の懐かしさを感じる。首都プノンペンも清潔な美しい町で、カンボジア王国は平和で穏や

かであった。1970年、あの穏やかな国内戦が勃発し73年のポルポト派政権に信じ難い粛清、ただ不吉な情報ばかりが伝えられた。再訪の機会は、88年にやってきた。上智大学石澤良昭教授を団長に調査団と報道陣のアンコール訪問。セゾン美術館から派遣された。地雷のため近づけない遺跡もあるが、アンコール・ワットの偉容は不変で、祠堂前テラスでのアプサラ舞踏に感動した。がしかし、内戦の被害は目を覆うばかりで、人々の生活は貧困し、町も村も汚れていた。3度目のアンコール行きは2006年、石澤教授らがバンテアイ・クデイ遺跡から発掘した274体もの仏像を保存・展示するための博物館を建設する手伝いであった。シハヌーク・イオン博物館は翌年に開館。2度現地へ行った。アンコール観光の町シェムリアップではホテル建築ラッシュ、道路には車と人があふれ、ただ騒々しい。観光客があふれるアンコール・ワットは変わりが無いが、遺跡はどこか瘦せてみえた。カンボジアでの極端に変化する3度目の出会いは、人間社会と美術との関係を考えさせられる。(2011年度にアンコール・ワット展を企画中です)

【館長 鍵岡正護】



シハヌーク・イオン博物館

近頃の美術館 ニューフェイス紹介

初めまして。子川さつきと申します。以前はデザイナーをしていました。商品パッケージのデザイン、中でもジュースや乳製品といった、食品のパッケージを主に制作していました。食品のパッケージを作る際、何が重要かという点、ふつう、味を知らないものは口にしないので、逆に、いかにパッケージで味覚を伝え、「目新しい」「美味しそう、試してみたい」に変換するかが勝負でした。(リニューアルなどはまた勝負所が違いますが)そしてこの度、岡山県立美術館で働くにあたり、今までの経験を生かして、デザイン全般―広報物や、サイン関係など、諸々を強化する役目を頂きました。来館していた側から一転、お迎えする側になった訳ですが、実際に動めてみて、お客様に接する場所で働けるのは大きな変化でした。ですが、デザインをする事については、たとえば展覧会の内容を伝え、来たいな、と思ってもらうにはどうするか、を考えているが、思いながら過ごしています。最近では、[版画の表現と技法展]のために版画のしくみを説明するパネルの制作や、8月末から始まる[おかやまアート・コレクション探訪]のチラシ制作をしています。どちらも身近にあるけどあまり目に触れ

【学芸員 子川さつき】



「版画の表現と技法展」解説パネル

ない、意識されないものを知って頂くため、前者はイラストを使う、後者は「コレクション」を意識した色合いを使う、といった工夫をしています。前者はちょっと間に合いませんが、後者は機会がありましたら、手にとって見てみてください。さて、県立美術館は来春リニューアルします。これも現在進行中ですが、サイン関係などもデザインをまとめて分かりやすくし、人にやさしく生まれ変わる予定です。これを機に、県美のはたらきを一貫したイメージで打ち出す事で、皆様により親しんで頂けるようにしていければ、と思っています。どうぞよろしくお願いたします。

【副館長 森 見朗】

岡山県立美術館開館20周年記念座談会

21世紀は「文化の世紀」と言われており、モータリゼーションの発達や急激な情報化の進展等により社会経済情勢が大きく変化するなかで、文化による地域社会の活性化や国境・県境を越えた地域の人々との相互理解への期待が高まっています。そうした時に、当県立美術館は昨年8月に入館者300万人を達成し、この3月で開館20周年を迎えました。当館では、今この時を美術館ルネッサンスと位置づけて、県立美術館の果たすべき役割とは何か、地域文化の振興に何をなすべきかということ、美術館設置の原点に立ち返って実行に移すこととしています。そこで、開館20周年記念事業として、岡山を拠点に広く内外に岡山の文化を発信しておられるリーダーの方をお招きし、岡山の文化を語っていただく座談会を開催しました。この座談会は、当美術館の鍵岡館長が司会進行を務め、第1回目を5月25日に、実業家として様々な社会貢献活動を展開し続けてきた大原家の当主で(社)岡山県文化連盟会長の大原謙一郎氏と、岡山の言論・文化を牽引する山陽新聞社の越宗孝昌代表取締役社長をお迎えし、「地域づくりと文化」と題して開催しました。また、第2回目は6月28日に、日本の美術界の卓越したリーダーである大原美術館館長の高階秀爾氏と、新しい文化振興ビジョンを策定した岡山県文化施策を担当する山口副知事をお迎えし、「芸術文化と美術館の使命」と題して開催しました。その座談会の概要は次のとおりです。

第1回テーマ「地域づくりと文化」(5月25日開催)

- 文化によるまちづくりについて
 - ・まちづくりにひとつの決まったパターンがあるのではなく、それぞれの街にそれぞれ合ったまちづくりがあると思います。その中でいくつか懸念点があります。ひとつは、生活の中から興ってきたことをひとつのイベントとして一緒に楽しんで頂くことです。ここで大事なものは、公共心を持った民間人とNPO、ボランティアマインドを持った行政、それとそのクオリティを保つプロフェッショナルが一緒になってつくりあげていく、そういうまちづくりが持続可能なものではないかと考えています。
 - ・まちづくりと文化は、他の真似をするのではなく、もっと自分の住む地域を愛して、その地域が生んだ多くの先人の業績を知り、歴史、風土を大切にすると、足元の良さを再認識することが非常に大事だと感じています。
- 地域文化のリーダーの育成、若い世代・子どもの育成について
 - ・子ども達に対する働きかけは、子ども達が美術品と遊び、触れる日を設けるなど美術が少しでも近くなっていく、そういう工夫が必要で。美術、絵画等に接して感動を心に持った子供達が育っていくことが楽しみです。
 - ・芸術作品に直に触れているいろいろなことを考えてもらうことは重要であり、できるだけそういう機会が幼い内から多くあることが本当に必要です。郷土の良さを知り、当時の岡山を見つめ直すことが、大きなものにつながっていくと思います。
 - ・合理的なことだけで文化が育つとは思えません。子どもを育てることこそ、財産だと思っています。
- 文化の発信、文化を通じた豊かな地域づくりについて
 - ・紙面でも、ネットでも、また実際に行動することで発信していくことはとても大事であり、世界の中でお互いに分かり合うための装置として文化が働くようになります。そのために私達も一生懸命に力を尽くしていくことが大きな意味を持っていると考えています。
 - ・芸術が国民や国全体を豊かにしてくれるという発想を行政が持つてほしい。そして、これからは瀬戸内海、日本海、太平洋とその3海を基軸とするなど未来志向の新たな圏域づくり、文化圏づくりを目指すのも方向のひとつだと思います。是非とも、東京一極集中、ミニ東京化へのアンチテーゼとして、人と自然、あるいは文化と産業が調和のとれるような斬新なエリアを我々はこれから考えていかなければならないと思います。



(中央)大原謙一郎氏 (右)越宗孝昌氏

第2回テーマ「芸術文化と美術館の使命」(6月28日開催)

- 芸術文化について
 - ・ヨーロッパと違い日本の文化の大きな特徴は、生活と文化、生活と芸術が非常に密接に結びついており、また文学との結びつきも深いことです。
 - ・岡山県では近年、文化振興基本条例や文化振興ビジョンを策定していますが、基本に流れる理念は文化を万人に、総ての人のものにしていくということが根底にあると考えています。それは、広く県民の皆さん誰もが文化の恵みを受取り、そこに参画し、支える、そういう意味で文化を万人のものにしていくという視点で考えていくべきだと思っています。文化の敷居を下げる、万人のものにする、そのために行政はどのような環境づくりができるのか、そういう視点で考えていきたい。
 - ・将来への一番大きな投資が文化ではないか。
 - ・芸術というのは歴史的にも、世の中の既成概念と常に戦ってきた部分があり、新しい文化を担っていく人たちのそういうエネルギーを期待したい。そして新しい文化を創り出していこうというエネルギーを評価したい。
- 美術館の役割・使命について
 - ・文化というのは歴史に根ざしています。そして、美術館は文化の保存・継承の装置であると同時に、発信の装置だと思っています。発信はもちろん国際的な発信もありますが、地域や世代間の発信が非常に大事だと思います。
 - ・若い人の教育が大事です。特に学校や子どもへの取り組みが大事であり、過去から未来へ向かっての架け橋になることが美術館の役割だと思います。また、新しい芸術家を育てる、新しい芸術を育てることも大きな役割であり、そういう10年先、50年先の社会的投資を是非やっていただきたい。
 - ・バーチャルにはないリアルなもの、それが芸術であり、情熱をかき立てる感動は、本物、実物を持っている力です。その実物を保存・継承することが美術館の役割、使命のひとつです。



(左)山口裕視氏 (右)高階秀爾氏

各座談会の最後に会場から当を得た質問が出されるなど、参加者の皆さんには大変熱心に聴講いただきました。この座談会を通して皆様からいただいた貴重なご意見を今後活かしていくとともに、20周年を期に岡山県立美術館が「県民とともに創る美術館」という視点に立ち、県民の文化力の向上と地域文化の発展に貢献できるよう努めてまいります。

【副館長 森 見朗】

展覧会よもやま話

1. 展覧会は目白押し

当館の収蔵品を紹介する「常設展 岡山の美術」は、今年度より「岡山の美術展」と呼称を変え、筆者が担当した展示を例に取れば、「国吉康雄ベストセレクション」・「現代美術の作品から」といった形で、毎回の展示内容でできるだけ具体的にお知らせしている。そして「作品と資料からたどる国吉康雄の歩み」・「五姓田のすべて展」関連企画 明治の油彩画秀作選」のように、取り上げる対象を思い切った絞った企画は「特集展示」と称した。さらに、いくらか新しい見解を表明したり、またそのために一時借用料を交えたりするなど、事実上「小さな企画展」と称しても差し支えない「所蔵品と県内コレクションによる赤松麟作展」・「満洲国四部・新収蔵品と雑誌挿絵をまじえて」などについては「テーマ展」という冠をつけた。

このような事情で、今年4月から当館の展覧会スケジュールは至って賑やかなものとなり、担当者個人の頭のなかでも展覧会は目白押しになったのである。

2. 「テーマ展」について思うこと

このような新しい方針に沿って仕事をして、微妙な気持ちになったのが「テーマ展」である。相応に努めをこらして、特別展のときと同じように作品も借用しに行っているのに、パンフレットのようない印刷物の制作も難しく、展覧会が形として残らない(自前の印刷機で簡単な配布プリントを作っただけ)。ご所蔵家の好意で作品を拝借しながら、何だか中途半端なことをしているような気持ちがないではなかった。

そんな「テーマ展」を今後どうやって育てていくのか。個人的には、自主企画の「特別展」が、それまでの調査研究の成果であり、到達し得た地点を示すものであれば、テーマ展は収蔵品やその関連作品、そして岡山近傍にある文化資源に光を当てる、「出発点

【学芸員 廣瀬久】

よそんちの展覧会と映画

今回の「よそんちの展覧会」は、高松市美術館の「開館20周年記念 コレクション+ (プラス) ひびきあう音色形」(7月25日〜9月7日) [図録: 図1]。同館が誇る現代美術コレクションに、3人の作家(藤本由紀夫・相泉希洋志・金沢健一)による、音が出る作品を組み合わせた展覧会。「コレクション+」という発想は、上のコラムに記した「テーマ展」にも通じていて、その点でも筆者には興味深い。衝撃的だったのは金沢の作品が展示されていた最後のセクションで、日高理恵子の絵画に金沢の《振動感》、森万里子の写真に金沢の《音のかけら》という組み合わせは意表を突くものだったが、互いの作品の魅力を驚くほどに引き立たせる秀逸な組み合わせである。日高の作品と《振動感》は、ともに粉状の素材(日高は岩絵具、金沢は炭酸カルシウム粉末)を用いながら、我々が生きているこの空間に宿る形象を、手探りで、しかし決然と浮かび上がらせる。その沈黙は長く深い。そしてこの沈黙を捉え切るこの映画については監督に尋ねられた時、沈黙する。その沈黙は長く深い。後者は日本在住19年に及ぶ中国人の監督が、靖国の問題に正面から取り組んだ作品。今日では刀剣は美術品としても扱われるが、靖国神社では刀剣がご神体である。映画の冒頭で「靖国刀」鋳造を再演する刀匠は、その刀の役割について監督に尋ねられた時、沈黙する。その沈黙は長く深い。そしてこの沈黙を捉え切るこの映画は非凡である。この場面を見て、筆者の場合は、刀剣以外のものを制作して戦時下の体制に協力した、当時の多くの美術家たちのことを思い出した。またこの映画は遊就館のことも触れている。これは日本初の軍事博物館で、ここには戦争を描いた絵画など、近代美術の文脈においても重要な作品が収められていて、これまでも美術史研究者が調査対象にしてきた。来月から当館で開催する「五姓田のすべて」展でも、同館から初代五姓田芳柳の作品を借用して展示する。一方的な主張のみの感情的に連呼する映画であれば、このように自らのフィールドに引きつけて、鑑賞後も考えを巡らせることはなかったであろう。個人の意識のなかへと冷静に訴えかける力をもつ秀作である。

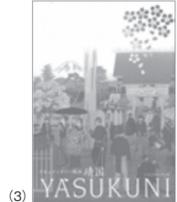
【学芸員 廣瀬久】



(1)



(2)



(3)